様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ４ 月 ２４ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５１１６５

研究課題名（和文）フィクション作品が防災・減災に及ぼす効果

研究課題名（英文）Effects of popular fiction on disaster awareness and preparedness

研究代表者
矢守　克也（Yamori, Katsuya）

京都大学・防災研究所・教授

研究者番号：８０２３１６７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,000,000円、（間接経費）　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、小説等のフィクションに描かれた災害事象が、人びとの災害観および防災意識の形成に及ぼす影響について検討したものである。第1に、阪神・淡路大震災の被災者の体験談を聞きとった大学生たちが、被災者との共同作業を通じて、アニメーション、絵本などのフィクション作品に再編しそれを用いた防災教育を実施した。災害の体験者と非体験者の共同作業が体験の語り継ぎに及ぼす影響について検討した。第2に、災害について扱ったフィクション作品について、〈選択〉と〈宿命〉をキーワードに分析を行った。この点について、「東京・地震・たんぽぽ」、「真昼のプリニウス」など、いくつかの小説を素材として原理的な考察を行った。

研究成果の概要（英文）：Effects of popular fictions on disaster awareness and preparedness are examined through disaster psychological analyses. First, fiction video clips and picture books were produced by university students based on the stories narrated by disaster victims in the 1995 Great Hansin Awaji Earthquake. The effects of the fictions in disaster education for school children were examined from the viewpoint of effective transfer of disaster experiences. Secondly, some popular fictions on natural disasters, such as "Tokyo, Earthquake, and Dandelion, " and "Plinius at Midday," written by popular novelists, were selected for analyses, based on the two analytical concepts, "choice" and "destiny."

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：2201

キーワード：フィクション　防災・減災　語り継ぎ　社会心理学

１．研究開始当初の背景

本研究には、2 つの研究背景が存在した。

第 1 の背景は、防災・減災の研究における「フィクション」への注目である。防災・減災の研究領域において、巨大化し複雑化する災害が頻発する現在、一般住民を対象とした防災意識の啓発の重要性がつとに指摘されている。

「自助・共助」の重要性が認識される中、知識啓発、意識高揚のための手段として、従来型のツール（マスメディア報道、専門家の防災講演、防災関連の図書、住民参加型のワークショップなど）とともに、その影響力が評価されつつあるのが、本研究で主題とする小説、ドラマ、映画等の「フィクション」が果たす役割である。

第 2 の背景は、社会的表象化理論に基づく大衆メディアの内容分析である。上記のように、防災・減災に果たす「フィクション」の働きについては実践的見地からそれを待望する声もあるものの、その知識啓発、意識高揚ツールとしての妥当性には疑問が呈せられることもある。

この点について、本研究では、社会的表象理論にもとづく大衆メディアの内容分析研究を実施して科学的検証を試みる。社会的表象理論は、一般の人びとにとっては新奇な科学的概念や科学技術が人びとの日常世界へと導入され定着する（あるいは受容されない）プロセスを明らかにしてきた。よって、その成果は、どのような「フィクション」が適切な減災・防災効果をもたらすのかを検討しようとするとき、有力な方法論的ツールを提供する。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の 3 つの研究を通じて、小説、映画等の「フィクション」に描かれた災害事象が、人びとの災害観や防災意識の形成に及ぼす影響について検討することである。

第Ⅰ研究は、内容分析研究であり、「フィクション」に登場する自然災害について、その形式・内容に関する分類を行うことを目的とする。

第Ⅱ研究は、心理実験研究であり、災害の語り継ぎ活動を素材として災害現象に関する「フィクション」を試作し、既成の「フィクション」とあわせて、それらを心理学の態度変容研究の手法を用いて実験的に比較し、どのようなタイプの作品が防災知識の獲得や防災意識の高揚に有効かについて実証的に検討することを目的とする。

第Ⅲ研究は、以上を総括し、災害について扱ったフィクション作品の効果について総合的に考察することを目的とする。

３．研究の方法

【第Ⅰ研究（内容分析研究）】

（Ⅰ-1）災害事象が登場する「フィクション」を網羅的に収集する。この際、メディア形態においても、対象年齢においても、内容面でも、可能な限り多様な「フィクション」をとりあげる。

（Ⅰ-2）収集した「フィクション」を、社会的表象理論の視点に立って、そこに登場する災害事象がどのような意味をもつ事象として描写されているかについて整理・分類を図る。

（Ⅰ-3）同時に、専門家へのインタビュー調査を通じて、災害事象の記述の正確性評定を得る。

第Ⅰ研究の推進にあたっては、研究代表者がこれまで実施してきた参加的な防災教育技法の開発に関する研究の成果（矢守・吉川・網代，2005 など）、および、災害事象を対象とした社会的表象理論に関する研究の成果（矢守，2001）を参照する。

【第Ⅱ研究（心理実験研究）】

（Ⅱ-1）第Ⅰ研究の結果を踏まえて、既往の「フィクション」作品、および、研究代表者が関与してきた災害の語り継ぎ活動を通して得られた素材をもとに作成した複数の「フィクション」作品を用いて、態度変容研究で用いられる手法を応用した心理学実験を実施する。

（Ⅱ-2）実験結果、および、第Ⅰ-(3)研究の評定もとに、防災知識の啓発、防災意識の高揚に実際に効果をもたらすことを実証した大衆メディア作品を〈作品集〉として提案する。

【第Ⅲ研究（総括）】

以上を総括し、災害について扱ったフィクション作品の効果について、社会的表象理論の観点から総合的に考察する。

４．研究成果

【第Ⅰ研究】

主に、小説に焦点をあてて検討した。災害を取り上げた小説は少なくない。取り上げ方は、もちろんさまざまである。たとえば、災害を引き起こす自然現象そのものや、災害に伴う人間・社会のリアクションの現実的な描写を中心に据えた小説が、いくつかある。実際に起きた災害や近い将来に想定される災害に想を得た、いわゆる「災害パニック小説」には、このようなタイプのものが多い。『日本沈没』（小松左京）、『震災列島』（石黒耀）などは、その代表例である。

他方で、災害そのものが詳しく描かれるわけではないが、災害という特異な出来事を通して初めて明るみに出るような人間の本質や、人間と自然の関係性を深く掘り下げようという意図をもった小説も存在する。あるいは、災害情報を生成・普及することの意味に、狭義の災害情報学の枠内では完全に見逃されている側面からアプローチしている（と見

なしうる）小説もある。
　もちろん、これら２つのタイプをきれいに分けることは困難である。実際には、両者の要素が渾然と混じりあっている小説が多い。本研究では、どちらかと言えば後者の志向性を強くもっていると考えられる小説について、〈宿命〉と〈選択〉をキーワードとしながら検証を進めた。
　検証の焦点の一つは、災害を扱ったフィクション小説は、災害情報は存在すべきか否かという根源的な考察の手がかりとなる点である。上記の通り、考察のためのキーワードは、〈選択〉と〈宿命〉である。災害情報の整備を含め防災に関する努力全般は、究極的には、災害に関するありとあらゆる〈宿命〉を〈選択〉に変換することに他ならない。通常、この目標の実現は、一点の曇りもなく望ましいことのように思われている。たとえば、大雨や強風の情報が与えられるからこそ、単にそれを〈宿命〉として甘受するのではなく、たとえば堤防の建設や事前の避難（といった対応を〈選択〉すること）が可能となるからである。
　こうした〈選択〉によって、数え切れない人命が救われてきたし、これからも救われるであろう。それは、たしかである。しかし、あまりに自明なことと思えるからこそ、この目標の是非について立ち止まって考えてみる必要もある。ほんとうに、すべての〈宿命〉を〈選択〉へと変換することが望ましいのか、と。〈選択〉可能であることは、常に安全や安心を社会にもたらし、人びとを幸福にするのだろうか。〈選択〉可能である（と認知される）がゆえに生じる不安や不幸も、存在するのではないか。
　この難問について、この難問について、本研究では、「砂の器」、「東京・地震・たんぽぽ」、「真昼のプリニウス」など、いくつかの小説を素材として原理的な考察を行った。

【第Ⅱ研究】
　阪神・淡路大震災の被災者（語り部活動の従事者）の体験談（語り）を、語りを聞きとった大学生たちが、中高齢の被災者との共同作業を通じて、アニメーション、ビデオクリップ、絵本（紙芝居）などのフィクション作品（一部ノンフィクション）に再編し、そうした教材を用いた防災教育を小学生対象に実施する研究プロジェクトを実施した。この取り組みを通じて、災害の体験者と非体験者の共同作業が体験の語り継ぎに及ぼす影響について、社会心理学の観点から検討した。
　具体的には、まず、研究代表者が 10 年以上にわたって参与観察を継続してきた阪神・淡路大震災の語り部団体（「語り部KOBE1995」）メンバー（中高齢の被災者）と神戸学院大学防災社会貢献ユニットの大学生が１対１のペアとなり、被災者の体験について今一度精緻な聞き取り作業を行った。
　この作業を通して、被災者の体験を、震災体験がまったくない現在の小中学生に有効に伝えるための教材（たとえば、個人プロフィールや被災した自宅を撮影した写真などを配したパネルやパワーポイントスライドなど）を共同作成した。
　次にそれら基礎資料をベースとして、大学生たちが、語りの内容を、中高齢の被災者との共同作業を通じて、アニメーション、ビデオクリップ、絵本（紙芝居）などのフィクション作品（一部ノンフィクション）に再編した。その上で、共同作成したフィクション作品を媒介物（メディア）として、中高齢の語り手、大学生が共同での語り部活動（防災教育活動）を、地元の小中学校で行った。
　その成果を、そうした「フィクション」を媒介としない通常の防災教育の成果と比較検証した。その結果、第１に、中高齢の被災者と震災体験がまったくない小中学生との間に位置する大学生（一部の学生は、幼いときに神戸・阪神間などで震災を実際に体験）、および、共同作成した「フィクション」を「つなぎ手」（メディア）とすることによって、震災体験や命に対する鋭敏な意識を３つの世代を越えて継承することができることが明らかとなった。これにより、「命の大切さ」という抽象的な命題が学ばれるのではなく、ライフステージの異なる位置にある個々の具体的な命に向き合うことで、それが自然な形で体得・感得されることがわかった。
　第２に、本活動を通して、「フィクション」を媒介とした震災体験の継承をきっかけとした新たな形の世代間交流が、地域コミュニティに誘発されることが明らかとなった。阪神・淡路大震災の被災地の多くは都市部であり、既存の社会的ネットワークが弱体化し、それが被害を拡大させ、かつ被災からの復旧・復興過程を遅延させたとの指摘も数多い。本実験は、こうした弱点を補うための一つの方向性を示唆し、将来へ向けたモデル事例となることがわかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　５　件）

① Yamori, K. 2014. Revisiting the concept of tsunami tendenko: Tsunami evacuation behavior in the Great East Japan Earthquake. (In) Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University (eds.). Natural disaster science and mitigation engineering: DPRI Reports (Vol.1), Studies on the 2011 off the Pacific Coast of Tohoku Earthquake. Springer Verlag pp.49-63. DOI10.1007/978-4-431-54418-0_5

② Yamori, K. 2013. A historical overview of earthquake perception in Japan: Fatalism, social reform, scientific control, and collaborative risk

management. (In) T, Rossetto, H, Joffe, and J, Adams (eds.). Cities at risk: Living with perils in the 21st century. Springer Verlag. pp.73-91.

③ 矢守克也 2013 防災教育における理科教育の役割 Rimse, 4, 2-8.

④ 矢守克也 2012 津波てんでんこの 4 つの意味 自然災害科学, 31, 35-46.

⑤ 矢守克也 2011 災害と文学－〈宿命〉と〈選択〉をめぐって－ 災害情報, 9,28-32.

〔学会発表〕（計 2 件）

① 杉山高志・矢守克也 2013 東日本大震災発生直後のテレビ広告に関する先行研究への一検討 災害情報学会第 15 回研究発表大会 群馬大学（桐生市市民文化会館） 2013/10/26

② 矢守克也 2012 「津波てんでんこ」の 4 つの意味 地球惑星科学連合 2012 年大会パブリックセッション「防災教育－災害を乗り越えるために私たちが子どもたちに教えること」 幕張メッセ国際会議場 2012/5/20

〔図書〕（計 5 件）

① 矢守克也 2013 巨大災害のリスク・コミュニケーション：災害情報の新しいかたち ミネルヴァ書房

② 矢守克也・前川あさ美 2013 発達科学ハンドブック 7 巻:災害･危機と人間 新曜社

③ 藤森立男･矢守克也 2012 復興と支援の災害心理学－大震災から「なに」を学ぶか－ 福村出版

④ 矢守克也 2011 増補〈生活防災〉のすすめ－東日本大震災と日本社会－ ナカニシヤ出版

⑤ 矢守克也・渥美公秀・近藤誠司・宮本匠 2011 ワードマップ：防災・減災の人間科学 新曜社

〔産業財産権〕
該当なし

６．研究組織

(1)研究代表者
矢守克也（YAMORI, Katsuya）
京都大学・防災研究所・教授
研究者番号：80231679

(2)研究分担者
（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者
（ ）

研究者番号：